

九 一紙一塵に籠る無限の感味

われく みろか い を おも 吾々は自ら生きて居ると思ふ。けれども實は、活きさして貰つて居るのである。自分の力ではない。自分を包み、自分の内に在る一切の物の御恩である。之を思へば、一塵一紙と雖も決して僉末にしてはならぬ。吾を包む個々の上に、無限の御恩を謝すると共に、之を有用に須ひ、貯積して他日の用に待たねばなりません。

むかしあるそう みち こころのま 昔或僧が道に志て師を求め、叡山の或寺に大徳が居らるゝと聞き、その御方を尋ねて、白河邊より山に登りました。だんぐ行く一つの谷川がある。この谷の奥が其の大徳の御寺のある所だと、云ふことを聞いて、樂みく登つて参りますと、川上から一莖の菜の葉が流れて來ました。そこで思ふには、一塵一芥みな佛物である、然るにこの菜の葉を漫に流すといふのは、誤つた了見である、その様な人を師と仰ぐことは出來ぬと、力を落し踵をかへして、少し下つて來ますと、忽ち後の方から、走り下つて参る一僧がある。「何事であるか」と尋ねれば「今一本の葉を流したれば、それを拾ひに行くのである」と答へる。聞いて前の僧は痛く感心し、「あなたは云何いふ御方か」と尋ねると、「この奥の寺に居らるゝ御方の弟子である」と申した故弟子でさへ此通りであれば、師の聖の徳も想ひやらるゝと感じ、また引返して山に入り、その大徳について修行されました。

これ ほんたい に はなし 之と反對に能く似た話は、伊深の泰龍和尚の逸話である。さる雲水が大根作務をやつてゐました時、それを片付けるに當つて、つい大根の青葉を一枚落して行きました。處がそれが泰龍和尚の目につきまして、翌日早速「昨日大根を片付けた者は誰であつたか」とお尋ね。「何某でありました」と申せば、「それをこゝへ呼べ」との事。雲水が参りますと、和尚巖然と構へ「貴様

は何と思つて、あの大根の葉を残していつた？、まさか捨てやうと思つたの
ではあるまい、けれど大根位といふ頭で、粗末に思ふ處があるから、不知不
識捨てゝ置いたであらう、お百姓衆が心を籠めて、汗油で作つたものを、有
難いとも何とも思はぬやうな不心得では、いくら修行したからとて、何にも
ならぬゆゑ、今日限り屹度この僧堂を出て行つて呉れ」との挨拶。雲水は今
更に自分の悪かつたことを耻ぢ、「誠に濟まぬことを致しました、已後は堅く
謹みますほどに、今度は是非に御許しに預りたい」と、折入つて誤りますけ
れども、泰龍和尚はイツカナ聞入れられない。役寮の人達も集つて、「あれは
平生、人並勝れて綿密な人でありましたに。決して再び斯様な不注意なこと
は、致しませぬことでありませうから、是非御勘辨を………」と云つて、種
々申し上げますけれども、「何もお前達の知つたことでない、人の情の籠つた
ものを、たとひ枯葉一枚でも、粗末にするやうな了見では、到底修行は駄目
だ、どうあつても出て貰ひませう」とあつて許されない。その雲水は、遂々
可哀想に、大根の葉一枚で追出されて仕舞ふたさうであります。